

林産試験場きのこセンターの一年を振り返って

富 樫 巖

きのこセンター（愛称）の開設

北海道のキノコ産業の姿を平成6年の資料で見えます。生産量は1万1千トン強で全国シェアの約4%、生産額は約81億円です。そして、このキノコの生産額は北海道における主要特用林産物の生産額の92%を占めており、キノコ産業は地域の振興に大きく寄与する一次産業としての地位を築いています。さらに、道民の食生活の多様化や健康指向の高まりなどから、キノコの需要は順調に増大してきています。

しかし、北海道のキノコ栽培は、本州企業で開発された種菌や生産技術をそのまま導入しており、北海道独自のものはごくわずかしかないので現状です。北海道と本州では気候風土が異なります。したがって、本州で開発された品種や生産技術だけに頼っているのは、北海道のキノコ産業のさらなる飛躍が難しくなる可能性があります。このような状況から、北海道に適した品種の開発や生産技術の開発が望まれていました。道は、こうした状況をふまえて、キノコ産業を積極的にバックアップするために林産試験場におけるキノコ研究のより一層の充実と技術指導体制の強化を図りました。その結果、林産試験場きのこセンター（図1、9名体制）が開設され、平成6年度より業務を開始しま

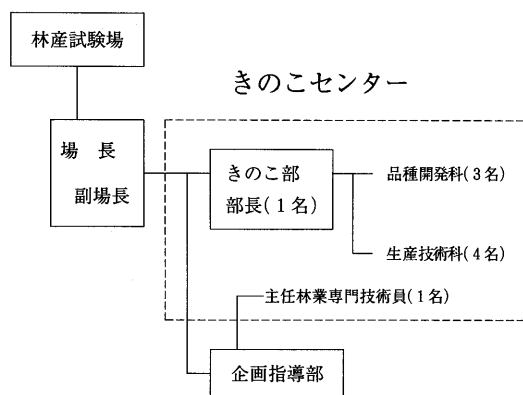


図1 林産試験場きのこセンターの体制

した。

そこで、きのこセンターが道民の方々からどのように活用していただいたかを、きのこセンターに寄せられた技術相談を通して、この1年間を振り返ってみました。

きのこセンターの業務

きのこセンターの業務内容としては、試験研究、技術指導、および栽培用キノコ原菌の提供が大きな柱となります（図2）。

試験研究としては、市販の種菌の特性把握、北海道に適した新たな優良品種の作出と選抜、新たなキノコの人工栽培化（菌床栽培）、効率的なシイタケ原木栽培技術の開発、キノコの生理や病理の解明、栽培機材の開発・改良などが課題となります。

技術指導には、生産者への現地技術指導、生産者を対象とした技術研修、さらには林業改良指導員（AG）などを対象にした指導者養成研修などがあります。また、生産者に対する情報提供も重要な業務です。

原菌提供としては、北海道の気候風土に適した品種の開発を行い、優れたものを種苗法や特許法による保護を申請した後、その原菌を生産者や生産団体などに安定供給することです。

以上の業務のほかに、キノコ生産者をはじめとする道民の方々からの技術相談への対応があります。そこで、この1年間に寄せられた技術相談を分類、分析してみました。



図2 きのこセンターの業務

きのこセンターに寄せられた平成6年度の技術相談

平成6年4月から平成7年3月末まで256件の相談がありました。平成5年度に寄せられたものは88件でしたので大幅に増加しました。この256件の中に道外からの相談が16件含まれていました。一年間の勤務日数はおよそ250日ですから、平均して1日に1件何らかの技術相談があったこととなります。ちなみに、林産試験場に寄せられたすべての技術相談は957件でした。

では相談方法をみてみます。技術相談は電話によるもの、文書によるもの、直接きのこセンターを訪問して相談するものに分けられます。その結果を図3に示しましたが、電話158件、文書10件、訪問88件で電話によるものが62%を占めました。電話が普及した現状を考えると、電話を用いるのが最も手軽で効率的な相談方法なのでしょう。

技術相談の内容は、図4に示したように「各種のキノコ栽培方法」について104件、「カビ・バクテリア汚染や害虫被害などのキノコ栽培上のトラブル」について29件、「それ以外」が123件でした。104件の相談をキノコの種類別にみると、菌床シイタケ32件、マイタケ20件、原木シイタケとナラタケが各10件、タモギタケ8件、ヒラタケ7件、エゾ雪の下4件、ナメコ3件、マンネンタケとクリタケが各1件、キノコを特定しないで一般的な栽培方法を尋ねたものが10件でした。キノコ別の相談を合計すると106件になり、前記の104件より大きくなります。これは、1回の相談で2種のキノコの栽培方法をたずねたものがあったからです。

平成5年度と同様に、菌床シイタケに対するものがトップでした。このような結果からも道内で菌床シイタケがブームになっていることが分かります。次にマイタケの相談が多く、マイタケの生産量と価格が上昇気運にあることと関係がありそうです。

道内でシイタケと生産量を争っているエノキタケについては、昨年度と同じく技術相談が全くありませんでした。この理由としてはエノキタケの生産技術がほぼ完成しているためではないかと思います。しかし、問題がないわけではありません。きのこセンター整備に当たって、これまでなかったエノキタケ用の栽培施設を整備しました。近い将来、北海道独自のエノキタケの品種を選抜し、新たな栽培技術を確立するための研究に着手したいと考えています。

前記の「それ以外」123件の中身を見てみます。最も多かったのが、野生キノコの分類で29件でした。いずれも、きのこセンターに現物を持参して相談にきたものです。以下、キノコの種菌について25件、きのこセンターの施設・設備や仕事内容、見学・視察などが16件でした。そして、オガコ、キノコの栄養源、培地のpH、キノコや培地成分などの分析方法などの質問がありました。

以上の技術相談の中で、最も印象深かったのは、菌床シイタケの栽培上のノウハウを教えて欲しいとの相談でした。しかも、これまでに全くキノコ栽培を手掛けたことのない方を中心に、異口同音に聞かれました。一口に言って、現時点で栽培が実用化しているキノコの中で最も金もうけが難しいのが菌床シイタケです。私たちきのこセンターの職員としては、技術的な相談については持っている知識の限りお答えしてきました。しかし、これからシイタケの菌床栽培で生計を立てようとしている方に、技術面だけアドバイスすればよいのかとのジレンマに悩みました。以前の技術相談は、すでにキノコ栽培を職業としている方々か、趣味でキノコ栽培をしたい方々からのものがほとんどでしたから、経営面に気を配る必要はほとんどありませんでした。

このような菌床シイタケに興味のある方々のおかげでしょうか、菌床ブームとともに北海道のシイタケ自給率が9割を超えました。

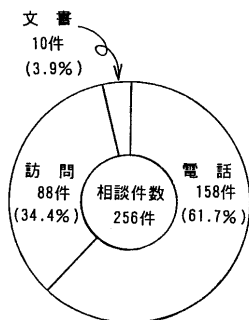


図3 技術相談の方法

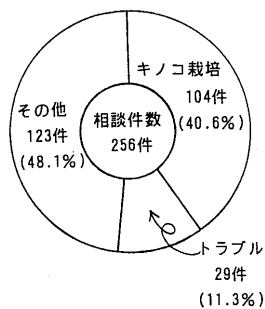


図4 相談内容の分析結果

終わりに

きのこセンターに寄せられる技術相談の件数は2年目に入っても衰えがみられません。今後とも、道民の皆さんから頼られるきのこセンターを目指して職員一同、より一層の努力をしてみたいです。

(林産試験場 生産技術科)